

「集落活性化県民討論会 IN 会津」 討論概要

- 1 開催日 平成 21 年 11 月 19 日 (木)
- 2 開催場所 会津若松ワシントンホテル 2 階「双鶴」
- 3 主な意見等

【集落調査を行った大学生】

- 住民が楽しみ、来た人も楽しむことが活性化につながる。地域の活性化には心の活性化も大切。
- 住民の方々との触れ合いを通じて普段の生活にはない刺激を受けた。
- 集落にはおいしいものがあった。わらびやぜんまいなど。地元でしか食べられない味に感動。地元だからこそ感動が味わえる。
- 集落には固有の食文化やゆったりした時間、人の温かさがあり、来る前のマイナスのイメージが払拭された。
- 地域の「さいの神」のための萱刈りをしたことで、伝統行事に参加するチャンスが得られた。

【調査を受け入れた集落住民の方々】

- 米を作るのにも経費がかかる。この経費を捻出するために、学生がおにぎりを作って付加価値を付け、学園祭で販売することを考えた。そういうことなら我々も行って手伝わなくてはならないとなった。売上げにより経費を払っても余りがでた。
- 民泊受入について最初は不安だったが、受け入れてみると結果は大成功だった。
- 来てくれたことがうれしくて、送別会では郷土料理で学生たちをもてなした。涙のお別れでつらい思いをしたが、これからもこの交流がつながっていけばよいと思っている。
- 交流人口を増やし、地域の外からの視点で地域資源を発見してもらうためには若者との交流が大事。交流により、道の駅の売上げが増え、耕作放棄地も減った。
- 地区にある農園は、後継者がいなくて困っている。本日の討論会で、企業組合をつくれれば生き残れるという提案をもらったが、いいお土産となった。

【行政関係者】

- 学生たちが住民と一生懸命に話し合いをしている姿を見て、これが活性化だと思い、「オレが2年かけてやったことを学生が3日でやった」という発言をした。
- 県は交流事業、特に団塊の世代を対象に定住・二地域居住に力を入れているが、若者にも広げたいと思っている。今回、大学生など若い人に知恵やアイデア、パワーがあることが改めてわかった。

【一般県民席】

- 若者の力を最大限に引き出し、地域の魅力とつなげることが大切であり、この人材をいかに育成するかだ。自分に何ができるか考えている若い人を地域でどう受け入れるかが重要だ。

【大学生席】

- 棚田オーナー制度を提案し、地域の方々と取り組んできた。

【大学関係者】

- 棚田オーナー制度は地域を7回訪問するカリキュラムで行っている。地域に来るほどに住民と仲良くなる。
- 若者は活性化の原動力となる存在。力がある。大学生を地域に派遣することは将来、旅行に来たり、第二の故郷になったりと発展性がある。また、学園祭がビジネスに発展すればよい。
- 今年、大学生を集落に連れて行ったわけだが、大学生がその気にならないとダメ。集落からは、無理のない関係をつくろうと言われて事業を始めた。楽しいだけでなく、“やった”という実感が大事で、それが学園祭だった。成果を確認し、小さいことから積み上げていくことが大事。

「集落活性化県民討論会 IN 福島」 討論概要

- 1 開催日 平成 21 年 11 月 30 日 (月)
- 2 開催場所 福島大学人間発達文化学類棟 2 階「大会議室」
- 3 主な意見等

【集落調査を行った大学生】

- 集落ごとに特徴があるが、住民に温かさがあることが共通している。
- 調査に入って住民に力があることや住民のやさしさを感じた。
- 活性化には新しい視点、若者など外部の力だけでなく、何らかの経済循環も必要。地域に増えている空き家をレンタルするなど活用できないか。
- 地域の特産品を地域活性化につなげられないか。地区の祭りを復活して人を呼び込みたい。また、地区の環境は病氣療養に適しているので空き家を利用できないか検討していきたい。
- この取組みを持続させるためには、大学生グループ同士が調査の成果を共有できる仕組みをつくり、大学生と地域とのネットワークをつくるのが大切。
- 交流を続けることで深く長く集落と関わっていけると思う。まず大学生だけで交流会をもてないか考えていきたい。

【調査を受け入れた集落住民の方々】

- 学生にボランティアで道路の草刈りをしてもらった。雨の中、汗をかきながらの作業であった。大変助かったので、来年もきてほしい。また、これがスムーズな大学生の受け入れにつながったのだと思う。
- 若い人が来ることで刺激を受け、住民がいきいきしていた。
- 80代のおばあちゃんは若い人と話をしたくてしょうがなく、聴き取り調査時間が予定よりオーバーした。これだけでもよかった。
- 大学生が来て集落の空気がちょっと変わった。大学生との交流を続けていきたい。
- 若い学生に入っていたいただいたことは大きな刺激となった。これからも若い人々を受け入れて何かイベントをしたいと考えている。
- 地区の踊りで浴衣を学生に着てもらい、よい思い出となった。学生との心のつながりができた。これからも交流を続けていきたい。
- 住民には家族と同じ感覚で大学生に接してもらった。地域活性化には若い人たちの力が必要。
- 大学生が、携帯電話の電波が入らない、インターネットが使えないような地域に、どのような魅力を感じているのか知りたい。
- 意識改革をいかにしていくかだ。地域の人が話し合いをすることが大事。住民がいかに夢、生きがいを持つか。
- 獣害、特にイノシシの被害が大きい。イノシシが商品にならないか。

- イベントの際に連絡を取りあうなど、今回の集落同士が交流を深められないか。

【一般県民席】

- 昨今の健康志向から、集落までのウォーキングイベントなどの企画を検討したらどうか。
- 東京にいた我々にとって福島にあるものはすべて東京にないものなので自信をもってほしい。自然、果物、野菜、ウォーキング、空気など都会にはないものだ。

【大学関係者】

- 学生たちがネットワークを縦、横につなげ、それが発展していくことによって継続的な活動につながる。それを大学が支援していければよいと思う。